星空物語

與昂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星空物語

【Ｎコード】
Ｎ１７０５Ｉ

【作者名】
與昂

【あらすじ】
願いを叶えて欲しいと星に願った少年少女のファンタジーストーリ
猿に願った少女猫に願った少年蛇に願った少年鼠に願った少女蜥蜴に願った少年
この男女の願いは今、叶われようとしていた。
その願いとは――――？

一つ目の願い　それぞれの願いであり　皆の願いであり

見える世界(げんじつ)　見えない世界(みらい)

星が瞬くとき

願(いのり)い事は叶われる。

ある夏の日の事、蒸し暑く気温は３０度と言ったサウナ状態に達していた。人が集まるこの教室では余計に気温は上がっていき生徒たちが机に顔をつけて何とか気温を下げようとしている最中
そんな一人である宮(みや)　夕人(ゆうと)は窓側であり風は軽く入ってくるものの日差しはそれ以上に夕人の気温を上げようと夕人にまっしぐらに日差しを浴びせていた。
茶色の髪が余計に光を帯びる。そんな時一人の少女が笑顔で夕人に抱きつかんと走り夕人の背中にダイブ
そのダイブの反動は抱きついた少女ではなく夕日の背中と体力に大いにダメージを与えた。
以上に気温が上がっている中、抱きつくという行為は余計に気温を上げるだけであり冬には適した行為であろう。
しかし、今の時期である”夏”には一番向かなく、そしてただ単に体力を貪り食う行為に発展するわけだ
その少女のミルクを入れたチョコレートの様な色とショートより長めの髪が緩やかに動いく

「真央！やめろ！！。暑い！！」
「なんだよ！ゆう君冷たいなぁ」

夕人に名前を呼ばれた少女の名前は宮識（みやしき）　真央（まなか）。その少年の様な無邪気さと好奇心さは随一であり、その明るさや人懐っこさにクラスでも中々の人気者である。
それと正反対に近いのが幼馴染である夕人である。あまり人とのなれ合いは好きじゃないし、そんな性格のせいか友達も多いとは言えない
真央は夕人に注意を受け少し唇を尖らせながら夕人から渋々離れていった。すると少しだけ夕人は気温を下がるのを感じた。

「ていうか、真央なんでお前。汗かいてないんだよ。」
「だって、前の授業図書室だったし。クーラーがついてたからね！いいだろ～」

真央は夕人の隣のクラスである１―３であり、その前の時間は図書館だったため汗はかいていない、なにせここの学校五星学校はなにより設備がいいためクーラーは色々な所に設置してあった
五星学校が作られてからもう１００年以上は経つのだろう。その市内では一番長い歴史を持つ学校であることが有名だ。
真央は時計に目をやるともう次の授業までの時間は一分を切っていた。真央はそのことで顔を真っ青にさせながら慌てて戻っていった。
そんな真央を見てまさに嵐が去って行ったと夕人は思う

空に目をやると薄らと白い影を残す月が上まで迫っていた。

現在の時刻は午後１２時である。

＊　＊

今、少年はかなり焦っていた。その焦る少年の名前は、一之瀬（いちのせ）　古玉（こだま）である。廊下を走り抜け先生に注意されながらも走り続けた。少年がなぜそんなに走るのかと言うと
彼の幼馴染である經堂（きょうどう）　志江（しえ）がいないからであった。
普通なら、放って置くのであるが、今日はそういう訳にも行かなかった。何故かというと、經堂　志江がメールで「いまから自殺するから」などという不吉なメールを寄こしてきたからである。
古玉は焦ってた。今は自分の命より大切な幼馴染である女の子が自殺するなどあってはならない
古玉は足を急がせるが彼は何せ運動が得意ではない。場所は特定できているもの中々前が進まない。階段まで差し掛かると古玉を溜息を吐く
自殺と言ったら屋上である。そんなベタな場所に行くには、３階まで走っていかなければならないということだ。
体力も人よりない古玉は息を吐きだすだけでも体力を奪っていた。
その前は彼なりの全力疾走で教室まで屋上への道のりである階段まで来たのはいいものの。彼の体力はもう底につきそうになっていた。
それでも、やはり大切な幼馴染である志江を助けたいという気持ちが勝り、古玉は大声を上げながら３階まで一気に駆け上がっていく
途中でこけそうになりながらも彼は走って走って走って走って。
古玉にとっては一時間経ったような気分であるが正確にはまだ２０分しかたっていなかった。それでも３階まであがるのは遅いぐらいである。
息を乱しながら急いで屋上のドアを開くと、漆黒の髪を靡かせる一人の少女。その後姿だけでもその美しさは予想できるほどの美しい髪であった。

「志江！じっじじじじさじさじさ自殺なんてやめてよぉぉ！！オレ志江がいないと悲しいよォ！！」
「あっ、古玉。来てくれたの？まあ、予想通り」
「えっ？」

志江の言葉に首を傾げて大粒の涙を零している古玉が眉を下げる。彼女はまるで今自殺するような態度ではなく、口に頬張っているおにぎりをゴクリとその喉に押し込んだところであった。
そんな志江の今の状況に古玉は理解するより先に志江を抱きしめた。これもいつもの事であり、志江はこれは望んでメールしたのであるからこの予想の行動に志江のココロは満たされる。

「よかったよ！本当によかったよぉ！志江が自殺なんてするっていうから…オレ、オレェェェ！！！」
「ごめんごめん。古玉が来てくれたからまた生きたくなったよ」

またと言うのは、このようなメールを送るのは初めてではないからだ。もう１０回、いや２０回以上になるだろうか。志江は古玉に構ってほしいが為に古玉の純粋な気持ちを利用して自殺するなどというメールを送っているのだ。
最初は悪戯のような感覚で送っただけだったのだが、泣きながら自分を探してくれてそして優しく抱きしめてくれるという最高の行動までしてくれた。それからというもの
志江は古玉が自分を構ってくれないとあの自殺予告メールを送りつけるようになったのだ。古玉も古玉であり、それを嘘だとは疑わない古玉はとても純粋である。だから自分の大切な幼馴染が自殺をするとメールをよこせばすぐに駆けつけ抱きしめる。自殺するのを嘘だとは思わない。否、思えないのかもしれない
この世で一番信頼している志江だからこそ、志江の言うことを何が

何でも信じたいという思いがある

「もう、死にたいなんて思わないでっ。オレが、ずっとずっとずっとずーーっと一緒に居るから」

「ええ、思わないわよ。古玉がずっと、私と一緒に居てくれるならね」

恍惚の微笑みは古玉からは見えなくて志江は今までにないくらいの幸せをその胸にため込みながら古玉の肩に顔を埋めていつまでもこんな事が続けばいいとそう願った。

空に目をやると薄らと白い影を残す月が金色を少しだけ帯びていた。

現在の時刻は午後3時である。

＊　＊

いままで降り注いでいた日差しはあっというまに暗闇に吸い込まれていった。教室に一人佇む少女はアーモンド形の瞳を少し伏せがちにしながら夜空に煌めく星に目をやる。

夜空に輝く星はまるで空に打ち上げられた宝石のように煌めき瞬いている。しかしその美しい星に目をやっているにも関わらず少女の瞳は何処か憂いを帯びているようだ。焦がした茶色の髪をツインテールをして居る為風に誘われてツインテールの髪がヒラヒラ動く

少女はキッと瞳を強張らせ一つ息を吐きだした。その瞳はさっきの憂いとは別物であり決意を秘めた瞳が空に向かう。

少女の名前は飛揚（ひしょう）　綺羅（きら）

「願い事は――――――叶われる。」

そっと綺羅以外いないこの空間に一言言葉を漏らす。そっと綺羅の声が透き通って夜空に響くようだった。そっとまた息を吐きだすと綺羅の黒色の瞳が空色の瞳に変わりゆく

絶対に願い事は叶われる。誰かが願うたびに、それはある意味この世にとって悲しいことだということは綺羅はあえて言わない

空に目をやると薄らと白い影を残していた月が完璧に金色(こんじき)に変わり空を仄かに金色に変えていた。

現在の時刻は午後6時である。

＊　＊

星が瞬き月がが仄かに暗い夜道を照らしだす。そんな暗い夜道を歩くことは彼にとっては何一つ不憫ではなかった。むしろこういう暗く本当に月明かりだけで道を判別できるぐらいが好きなのだ。

そんな変わった趣味を持つのは如月(きさらぎ)　匝(めぐり)。彼はクラスではとても地味な存在であり、今日、アイツいたって？誰か見た？見ていない。そういえば如月ってこのクラスだったけ？のやり取りがあまり珍しくなくなってしまってた。

しかし本当は匝は誰かに自分の存在を気付いてほしくて誰かにいつでも名前を呼んでもらえていつでも誰かに必要とされたい

それが如月　匝の今の願いでもあり。それを叶わないと決め付けているのも如月　匝であった。

今日の夜は一段と星が煌めいていてこの暗い夜道がよりいっそ引き立たせていた。匝もこの暗闇同様漆黒の髪であったため暗闇に溶け

込む、だけど少しはね気味のその髪はシルエットだけよく見える。
こんな夜の星にはきっと願い事だってなんだって叶えてくれそうな気がして匝がそっと唇を動かす。

「どうか、オレの存在に気付いてくれる人がいるように」

空に目をやると薄らと白い影を残していた月が完璧に金色(こんじき)に変わり空を仄かに金色に変えていた。
だがその月よりいっそ耀いていたのは夜空に打ち上げられる星たちであった。

現在の時刻は午後9時である。

＊　＊

色々な願(いのり)い事が集まり星たちに飾り付けられていく人々の願いが星に吸い込まれていく。そして午後9時ジャスト。5人の願(いのり)い事が一気に集まり。弾け溶け合っていく
5つの願いは

一人の明るい少女は猿に願った。
「――――不思議なことがおこったりして、友達が増が色々増えたら楽しそう！」

一人のすました少年は猫に願った。
「――――いっきに不思議なことがオレの周りを満たしてくれてもい

いよな」

一人の臆病な初年は蛇に願った。
「どうか、死にたいなんて思わないように。彼女が望むなら不思議な世界になってもかわない」

一人の狂った愛の持ち主の少女は鼠に願った。
「ずっと、ずっと、一緒に居られますように。その為ならこの世界が不思議なことで満ち溢れてもいいわ」

一人の地味な寂しがり屋は蜥蜴(とかげ)に願った
「どうか、オレの存在に気付いてくれる人がいるように――って、そんな不思議なことがいっぱい満ちたら楽しいだろうなぁ」

願い(いのり)事は叶われる
少女が言ったように――――――

end

一つ目の願い　それぞれの願いであり　皆の願いであり（後書き）

ここまで読んでくださり有難うございます！
今一秒でも誰かが願っていてその願いは世界中の誰かがその一秒の中で一緒の願いを思っているとしたら。ものすごい素敵だなぁと思って書いてしまいました。
これからも、頑張って書いてみたいです！

二つ目の願い　猿と蜥蜴への願い

きっといつだってボクの目の前には不思議なことが広がっているに違いない。でもボクの眼はそれを捕えることなんてできないからボクはしょうがないと何時(いつ)だって諦めているの。

真央は電波系の少女でもあった。それは学級でも知らないものはいないぐらいの電波系である。その明るさと人懐っこさからクラスの人気でいられるものの。もしただの電波系少女であったらただの変な少女であり、嫌われていたかもしれない
今日もいつも通りに夕人と一緒に帰るところだった。高校生になっても幼馴染の関係は崩れず声をかわさなくても二人一緒に帰るのが当たり前になっていた。そんな幾度目かの帰り道、真央が不図唇を動かす。

「ねえ、ゆう君。今、ボクが思っている以上に世界には不思議なことがいっぱいあると思うんだ。」
「はあ？」

いきなりの変な質問に呆れたような声が返ってきた。そんな夕人の返答なんて最初からどうでもよかったように真央は2、3度瞬きをして空を仰ぐ。空の色は夕日の色で染まっており、艶やかな橙色に姿を変えていた。昼間の青空とは思えないほどの空に真央がまた2、3回瞬く
夕人も真央の電波発言には誰よりも慣れているはずなのだが、突然の質問には夕人の最初の呆れがちな返答が返ってくるのはいつも通

りでもあった。夕人はその呆れがちな言葉の次にそれで？という事がをつけたした。

「だってね。ボクの目で捉えきれないだけで、いっぱいいっぱーい不思議なことがあると思うの。そう、例えばね、この世にはパラレルワールドが幾つも存在するとかでも同じなんだけど。もしかしたらボクたちの目の前には幽霊がいたりしたり、突然異世界にトリップ！なんてこともこの世界のどこかではあると思うの。でもね、それが今無いのはきっとボクたちの目が退化したせいだと思うんだ。昔の人は妖怪とか幽霊が日常茶飯事に見えてたっていうでしょ？だけど現代のボクたちにはそれが見えない。ってことはボクたちの目は能力的に退化しているってことでしょ？トリップだって最初は何か異世界的な何かに遭遇したり異世界の扉を見つけるとかではじまるじゃない？でもボクたちにはその異世界的な何かは見えないわけだから、異世界にトリップしないわけでしょ。――――ただボクたちが見えないだけでボクたちの周りには色々な不思議があると思うんだ。ボクはそんな不思議なことを捉えられる瞳になりたいなぁ。そしたら、異世界のお友達だって、幽霊のお友達だって、妖怪のお友達にだってなれるかもしれないし、なにより、皆と過ごす時間だって、今ゆう君とこうして帰る帰り道の時もさもっともっと楽しくなると思わない？」

長い言葉をつらつらと言い終わると真央は自分の鞄にあるミルクティーを口に流し込んだ。これだけの言葉の羅列を頭の中で処理するのだって大変だろうにそれを一切噛まずに言うのもまた難しいだろう。

そして最後の真央の言葉である疑問形に対して夕人は自分はどう返答すればいいのか分からなかった。その意見に賛成するのか、イヤ、賛成したらしたらで夕人も同じ電波系の位置におかれることはまず間違いない

しかしここで反対してしてもその夕人の意見である反対という言葉に対してそれはどうして？どうして私の意見に反対なの？なんて答えられるのが関の山であり、そんなことを言われた日には夕人は応えられる言葉の羅列はないだろう
昔に真央の意見に反対して疑問を投げかけられた時、夕人はその理由について何も述べれなくなってしまい、理由を言わないでいると真央から疑問の連発に苛まれるといることなってしまったのだ。
そんなことの二の舞なんてしたくはない。賛成も反対もできないのならもう一つの選択肢は中立的な意見を述べるしかない、そして今回の夕人からの中立的な返答はこうである。

「まあ、真央の言うとおりオレらには見えない何かがあるとしよう。そしてそれが昔の人たちに見えてオレらには見えないのは、その異世界的な何かがオレらに見える必要がないから目の能力から排除されたんじゃないか？それが見えなくても人間は生きていけると判断して進化していく過程としてその見える能力が無くなったんじゃないかとオレはおもうけどな」

少し電波じみた言葉だろうかと夕人は少し感じながら真央に目をやると真央はあまり納得していないような瞳で夕人を見ていた。だけどすぐに夕人から目を逸らして大きくため息を吐きだす。
夕人は自分の意見に納得したのだろうと思ったがそうでもないらしい、少し気が薄れたような瞳はどこかまだその異世界的な何かがあってほしいと願うような、イヤ、願っていない確信しているような瞳である
きっといつか自分は見えるようになって、きっといつか自分は異世界にトリップもしくは妖怪やら幽霊などと友達になれると思っている真央の心の中は幼馴染であり親友とも言える夕人でもその意見は覆せないのだろう
だったら最初から意見を言うなと言う話なのだろうが、思ったこと

はすぐに言ったり行動しなければ気が済まないというタイプである真央は言わずにはいれなかったのだろう。そんな真央の事を知っている夕人で無ければ切れているのは間違いない
どんなに変人扱いされようとどんなに邪険扱いされようと真央はその他の多数の人間の意見なんてどうでもよかった。真央にとって、自分の意見に対する周りの意見などそこら辺に生えている雑草と同じ存在なのだから。
そして唯一真央の意見に唯一干渉できるのは夕人の意見だけだった。
その夕人の意見にのっとり真央は口元を釣り上げて言葉を紡ぐ

「一人でも不思議なモノが見たいと思ってるんだから世界中にはもっとそれを望んでいる人がいるんだよね。だとしたらさ、きっと見えるようになるよ。だって、皆望んでいるんだから！」

猿に願った少女の願いは
不思議なことが起ること――――

＊　＊

きっといつかはオレをに気付いてくれる存在がいて、その子はいつだってオレの名前を呼んでくれてオレの話しを聞いてくれる。でもそれってオレの妄想で、でもオレは、そんな不思議（ありえない）なことを望んでいるんだ。

昔から匝は人とは全然違うモノを好んだり趣味として選んでいた。
それのせいか人と話は合わず幼稚園のころから孤立した存在になっ

ていた。匝も小さい時はそんなに気にしないでいたが、周りに人がいないこと違和感を感じたのはは小学４生の時のまさに夏真っ盛りの時期である。
夏休み友達同士で遊んだりするはずなのに匝は誰とも遊ばなかった。夏休みの宿題で友達と遊んだ内容を書けというものがあり普通ならすぐに書けるものなのだが、唯一匝だけがその宿題を出せなかったのだ。
そんなことで先生からは叱られ、周りから異端の目で見られ、匝はやっと自分に友達がいない事を気付き、周りに友達がいないことは可笑しいのだとこの時初めて匝に可笑しいのだと気付かせた。
可笑しいと疑問を膨らませながら今まで生きてきてもう9年になろうとしていた。だが、9年も経てば匝の思考能力もあがるわけだ。
そして匝が突き当たった答えが

”誰も自分を必要としていない”

そんな悲しい考えだった。実際家族以外はそうなのでそれは真実であるのだが、匝の心はもうすぐ壊れてしまいそうだった。初めて高校に来て話しかけてきた男子は自分は優しくクラス思いでいい奴だと思われたかったのだろう。
自分の優越感と羨望の眼差しで見られたいが故に話しかけてきたことは匝にはすぐに分かったが初めて話しかけてくれたこともあり、匝は心を躍らせて笑みを零す。男子もそれに気を良くしたのか質問をしてきた、それは本当に他愛もない質問
お前なんか好きなモノとかないの？んー例えばでいうと食べモノとかさ！そんな他愛もない質問に匝は自信ありげな笑顔を零しながら

「ドロップの残りカス」

普通に答えただけだった。そう、匝にとってはそれは普通の答えだ

った。自分の好きなモノを問われそれに答えただけただそれだけのことだった。だが男子はもっと違う答えを求めていたのだろう。
その顔は苦虫をいっきに5匹噛み潰したような顔であった。その顔を見て匝は絶望した、どうして自分は質問を答えただけなのにそんな顔をされなければならないのであろう。そして男子が最後に残した歪な笑みはどれほど匝を傷つけただろうか
そしてまた、匝は”人”から離れていった。
きっともう誰もオレを必要としてくれる人はいないのだろうと思うと匝の心の中は悲しさで埋め尽くされ不安で埋め尽くされた。そして今現在に至る、匝はもう影の様な存在になっていった。如月は今日いた？えっ如月ってこのクラスだったの？っという会話は当たり前そんな匝にとって不条理なこの空間を変えたいと匝は幾度となく願う。変えてほしい誰か、オレを見つけてほしいオレを受け入れてほしい必要としてほしい

「誰かオレを、――――見つけて必要として受け入れて、それが不思議な事でもかまわない！」

蜥蜴に願った少年の願いは
この場の打開と不思議なことが起きてほしいということ――――

これが、猿と蜥蜴の願い。

二つ目の願い　猿と蜥蜴への願い（後書き）

次は猫の願いを書きたいと思います。
匝は私の体験の様なものを手を加えて書いています
蛍の墓でドロップの残りカスが好きになりました…。

三つ目の願い　猫への願いはきっとこの中で一番残酷な

オレ以上にアイツを分かる奴はいないと思う。だけど、オレだって分からない事が沢山あるから、だからオレは分かってやりたいんだ。オレだけでも――――アイツを受け止めたい――オレだけしかアイツを受け止められないんだ。

「お～い！ゆう君！何たそがれているのかな？青春かな？そうなのかな？」

「――――真央、お前のその元気さだけはオレは高く評価するよ…」

屋上で寝そべっていたらそれは青春の為にたそがれているというのか？今日は風も心地よく吹き秋が来る前触れのように少しだけ冷たい風が吹いている。その為４時限目をサボり屋上に来たのだが何故か目の前には真央

休み時間でも昼休みでもないのにどうして真央がここいるのだろう。簡単に言うと真央もサボったのだ。夕人が廊下を歩いていく姿を見て真央もサボろうと夕人の後ろを気付かれないように後をつけて来たらしい。

真央は昔からそうだった。何かと夕人の後ろをついていき何かある度に夕人と一緒の事をやる。幼い頃それがウザったくて怒鳴りつけたことがあったが真央は泣くことは愚か笑ってこう答えたのだ

「だって、ゆう君といつも一緒に居たいんだもん！」

その言葉に流石に幼い夕人は黙ってしまって熟れたトマトの様に顔を赤くしたのを未だ覚えていてその時の写真を親がまだとってあるっていうのもかなりの問題ではあるが、幼い夕人にとってそれを初めて受けた告白などと勘違いしていた。イヤ，現在進行形で今でも勘違いしている。
小さい頃から電波系であった真央は小学校のクラスに一向に溶け込める気配を見せなかった。それは何故か？真央があんた等なんて下等生物よ！近づかないで！！っと言っているわけではない、むしろ逆で積極的に友達を作ろうとしているのだが何故みんな真央と友達にならないかと言うと
はやり電波系の言葉が祟って誰も真央との話しについていけなかったのが主な原因である。そう、そして決定的な話しがこれだ。一人のクラスの女子が泣いていた。彼女が泣いている理由は自分がいつも可愛がっていたペット、イヤもう家族と言える存在である犬が死んでしまったのだ。
その話を聞き他の女の子たちは一緒に目を潤ませながら女の子と一緒に共感しようとするが、真央だけは違った。真央はその女の子に向かって笑顔を向けたのだ。そしてもっとも残酷であろう言葉を選ぶ

「よかったね。それで、餌代とか減るじゃないか！ボクは、喜ぶといいと思うよ！」

それからである。真央への女子の態度が急変したのは、真央と軽い友情を築いていた多数の女子はその言葉を聞くと途端に真央と絶好すると言って勝手に友達をやめてしまったのだ。真央はそれが分からなかった、どうして自分は嫌われたのだろう
別に私は悪いことをしていないのに――――
真央にとって、その答えが一番だと思って言葉に出したのだが、その答えを求めていなかった女子たちは真央を突き放したのだ。夕人

はすぐに女子にさっきの言葉の訂正をして女子たちの真央への態度を少しでも軽減してもらおうと思ったが、交渉も虚しく、失敗に終わった。
夕人は自分が悪いわけでもないのに真央に謝った。こんな情けない自分でごめんっと…、真央はそんな夕人を見て首を傾げ笑みを零す

「ボクは、ゆう君だけいればいいよ」

それからだろうか、夕人が本格的に真央のことを理解しようとし始めたのは、それからというもの夕人はその他の男子の友達を一気に捨てて真央だけに友達を絞った。自分も真央だけいればいいと思ったからの行動だろう。
いつも真央といる様にして真央の電波の言葉に耳を傾け色々な意見を交わすことで真央を理解しようとした。自分だけでも真央を理解しようとしての思い、真央はその努力を今でも知らないのであろうが今ではクラスの人気者としていられるのは、夕人の影の努力のおかげだろう。真央にはそれを知らない。イヤ、知られてはいけないのだきっとそんなことを知ったら真央はすぐに人気者の地位を蹴っ飛ばして夕人の傍につきっきりになることは見え見えであったからだ。
真央も電波系ではあるが、夕人に対しては人間じみた感情をあらわにすることが多い
夕人の努力を知った時、真央はきっと嘆き涙を流すだろう。今まで自分はそんなにも迷惑をかけてきたのかと、夕人は真央に泣いてほしいわけではない寧ろ笑っててほしいのだ。だから、この影の努力はしられてはいけない、真央には笑っててほしいから
そんなくだらない回想を脳裏に流させながら、夕人は雲が疎らに散っている空を手で日差しを遮りながら見る。そこには美しい、空色があった。まるで真央の様に純粋過ぎる故の罪を表しているかのように

「やっぱり、ゆう君は恋の悩みでもしているのかな？」
「なんでだよ」
「だって、ゆう君の目、今もの凄く虚ろだもん！」

そういえば真央に昔こう言われた事がある。好きな子の事を考えているとゆう君の目は虚ろになるんだね！っと笑顔で。夕人はその事を思い出すと声を殺して笑いを堪え様とするが無理だったようで声を漏らしながら笑う。
真央は当然首を傾げてなぜそんなに笑うのだろうと疑問に思いながら夕人が笑っているなら夕人にとってそれは幸せなのだろうと思い真央も一緒に笑いだす

「そーだな。悩んでるよ物凄く」
「青春だね！相談があるならどんとこいだよ！！」

自分の事だとはつゆ知らず真央はポンと自分の胸を叩く。そんな真央に少し照れ笑いにも似たような微笑みを零しながら空を仰ぐ。キーンコーンカーンコーンという規則的なチャイムが鳴る、４時限目が終わったという合図に夕人は立ち上がる。
そんな眩しい笑顔がいつまでも続けばいいなんて、そんな夕人らしいような夕人らしくないような思いは真央には届く訳もなく、真央はその笑顔のまま夕人から仄かに零れる笑みに首を傾げるが夕人はなんでもないとまた笑う
今日はよく笑うなっと真央は思いながら笑うなら楽しいのだろう、楽しい事はいいことだ。夕人が楽しいなら何の文句もないし、寧ろずっと笑っててほしいぐらいだ。

「真央」
「ん？なに？」
「――いつになるか分からないけど、ちゃんと話すからな」

――――――きっとその時は告白になるのだろうけれど

「分かった！ボク待ってるね！」

猫へ願った少年の願いは――――

真央の事を理解できるようにと真央が喜ぶ不思議なことが起る様に

三つ目の願い　猫への願いはきっとこの中で一番残酷な（後書き）

次のお話は鼠と蛇の願いのお話を書きたいと思います。
猫と猿が一番恋愛らしい恋愛をしてくれるんじゃないかと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1705i/

星空物語

2010年10月10日21時59分発行